



そこで考えるとならないほど、じぶんもカムパネルラもあわねなような気がするのです。先生はまた云いました。

「ですからもしもの天の川がほんとに川だと考えるなら、その一つ一つの小さな星はみんなその川のその砂や砂利の粒にもあたるわけです。またこれを巨きな乳の流れと考えるならもつと天の川とよく似ています。つまりその星はみな、乳のなかにまるで細かにうかんでいる脂油の球にもあたるのです。そんなら何がその川の水にあたるかと云いますと、それは真空という光をある速さで伝えるもので、太陽や地球もやっぱりそのなかに浮んでいるのです。つまりは私どもも天の川の水のなかに棲んでいるわけです。そしてその天の川の水のなから四方を見ると、ちょうど水が深いほど青く見えるように、天の川の底の深く遠いところほど星がたくさん集って見えたがつて白くぼんやり見えるのです。この模型をごらん下さい。」

先生は中にたくさん光る砂のつぶの入った大きな画面の凸レンズを指しました。

「天の川の形はちょうどこんなのです。このいちいちの光るつぶがみんな私どもの太陽と同じようにじぶんで光っている星だと考えます。私どもの太陽がこのほぼ中ごろにあつて地球がそのすぐ近くにあるとします。みなさんは夜にこのまん中に立つてこのレンズの中を見まわすとしてごらん下さい。こっちの方はレンズが薄いののでわずかの光る粒——即ち星しか見えないのです。こっちやこっちの方はガラスが厚いので、光る粒即ち星がたくさん見えその遠いのはぼうつと白く見えるということがつまり今



二、ケンタウル祭の夜

ジヨバンニは、はつと胸がつめたくなり、そこら中きいんと鳴るように思いました。「何だい。ザネリ」とジヨバンニは高く叫び返しましたがもうザネリは向うのひばの植った家の中へはいってしまいました。

「ザネリはどうしてはくがなんにもしないのにあんなことを云うのだろう。走るときはまるで鼠のようなくせに。はくがなんにもしないのにあんなことを云うのはザネリがばかかならた。」

ジヨバンニは、せわしくいろいろのことを考えながら、さまざまの灯や木の枝で、すっかりきれいに飾られた街を通って行きました。時計屋の店には明るくネオン燈がついて、一秒ごとに石でこえたふくろうの赤い眼が、くるくるくるつとうごいたり、いろいろな宝石が海のような色をした厚い硝子の盤に載って星のようにゆっくり循環たり、また向う側から、銅の人馬がゆっくりこちへまわって来たりするのです。そのまん中に円い黒い星座早見が青いアスバラガスの葉で飾ってありました。

ジヨバンニはそれを忘れて、その星座の図に見入りました。

それはひる学校で見たあの図よりはずつと小さかったのですがその日と時間に合せて盤をまわすと、そのとき出ているそらがそのまま楕円形のなかにめぐってあらわれるようになって居りやはりそのまん中には上から下へかけて銀河がぱうとくわったような帯になってその下の方ではかすかに爆発して



「だって今朝の新聞に今年は北の方の漁は大へんよかったと書いてあったよ。」

「ああだけどねえ、お父さんは漁へ出ていないかもしれない。」

「きつと出ているよ。お父さんが監獄へ入るようなそんな悪いことをした筈がないんだ。この前お父さんが持つてきて学校へ寄贈した巨きな蟹の甲らだのとなかいの角だの今だってみんな標本室にあるんだ。六年生なんか授業のとき先生がかわるがわる教室へ持つて行くよ。一昨年修学旅行で（以下数文字分空白）」

「お父さんはこの次はおまえにラッコの上着をもつてくるんといったねえ。」

「みんながばくにあうとそれを云うよ。ひやかすように云うんだ。」

「おまえに悪口を云うの。」

「うん、けれどもカムバネルラなんか決して云わない。カムバネルラはみんながそんなことを云うときは気の毒そうにしているよ。」

「あの人はいちのお父さんとはちようどおまえたちのように小さいときからの友達だったそうだよ。」

「ああだからお父さんはばくをつれてカムバネルラのうちへもつて行つたよ。あのころはよかったなあ。ばくは学校から帰る途中たびたびカムバネルラのうちに寄つた。カムバネルラのうちにはアルコーラムで走る汽車があつたんだ。レールを七つ組み合せると円くなってそれに電柱や信号標もついていて信号標のあたりは汽車が通るときだけ青くなるようになっていたんだ。いつかアルコーラムがなくな



「お母さん。いま帰ったよ。工合悪くなかったの。」ジョバンニは靴をぬぎながら云いました。

「ああ、ジョバンニ、お仕事がひどかったらう。今日は涼しくてね。わたしはずうっと工合がいいよ。」

ジョバンニは玄関を上って行き、まずジョバンニのお母さんがすぐ入口の室に白い巾を被つて寝ていたのでした。ジョバンニは窓をあけました。

「お母さん。今日は角砂糖を買ってきたよ。牛乳に入れてあげようと思つて。」

「ああ、お前さんにおあがり。あたしはまだほしくないんだから。」

「お母さん。姉さんはいつ帰ったの。」

「ああ三時ごろ帰ったよ。みんなそこらをしてくれてね。」

「お母さんの牛乳は来ていないだろうか。」

「来なかったらうかねえ。」

「よく行つてとつて来よう。」

「あああたしはゆつくりでいいんだからお前さんにおあがり、姉さんがね、トマトで何かこしらえてそこへ置いて行つたよ。」

「ではよくたべよう。」

「ねえお母さん。ばくお父さんはきつと間もなく帰つてくると思うよ。」

「あたしもそう思う。けれどもおまえはどうしてそう思うの。」



